

りんご病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	早	並	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年よりやや高かった。(+) (3) 重点防除時期（花蕾着色期）に感染好適日は出現しなかった。(－) (4) 5月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
モニリア病 (実ぐされ)	早	並 (平年少発生)	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±) (3) 4月の降水量は少なかった。(－)
赤星病	－	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±)
うどんこ病	－	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は、平年並に少なかった。(±)
斑点落葉病	－	並	(1) 5月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
腐らん病	－	やや多	(1) 展葉期の巡回調査では、発生園地率は平年よりやや高かった (+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 5～6月は多くの病害の重点防除時期であるため、降雨前の予防散布を心がけ、薬量不足による散布ムラや散布間隔が空きすぎないように注意する。

【黒星病】

- (1) 本病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用は、耐性菌出現を回避するため、開花直前までとする。
(2) 苗木及び未結果樹は成木と同様に防除を徹底する。
(3) 発病葉および発病果は、速やかに摘み取り園地外へ持ち出し、土中に埋没させる等して処分する。
(4) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。

【モニリア病】

- (1) 葉ぐされ、実ぐされは早めに摘み取り処分する。

【うどんこ病】

- (1) 前年多発園では、落花期にコナケシ顆粒水和剤を特別散布する。

【褐斑病】

- (1) 褐斑病を重点対象とする場合は、表1を参考に薬剤を選択する。
(2) 一次感染期の防除が特に重要である。
(3) 発生の初期は園内の1～数本程度の発生なので、園内を歩きながらできるだけ多くの樹を観察する。部分的な黄変葉がみられたら、褐色の病斑内部に小黑点の分生子層の存在の有無を観察する。

表1 褐斑病を重点対象とした防除体系

防除時期	散布別	薬剤名（商品名）	防除対象
開花直前	定期	オンリーワンフロアブル	一次感染
落花期～ 落花20日後	定期	デランフロアブル ラビライト水和剤	
6月中・下旬	特別	ユニックス顆粒水和剤47	二次感染
7月上旬	定期	パスポート顆粒水和剤	
7月中旬	特別	トップジンM水和剤／ベンレート水和剤	
8月以降	特別	トップジンM水和剤／ベンレート水和剤	

【腐らん病】

- (1) 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。
- (2) 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に翌年も発生する傾向があるので、発病歴のある樹及びその隣接樹は注意して観察する。
- (3) 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	－	多	(1) 4月中旬の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(＋)
リンゴハダニ	早	並	(1) 基準圃場（北上市成田）でのふ化時期は、平年よりやや早い。 (2) 3月下旬～4月上旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年よりやや低かった。(－) (3) 5月の気温は平年より高い予報。(＋)
ナミハダニ	－	並	(1) 4月中旬の巡回調査での発生園地率は、平年より低かった。(－) (2) 5月の気温は平年より高い予報。(＋)
果樹カメムシ類	－	少～並	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は、盛岡市では例年より少なく(－)、金ヶ崎町では例年並(±)、一関市では例年より少なかった。(－)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を用いる。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルを用いる。なお、リンゴハダニ、ナミハダニの両方がみられた場合は、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布（落花期、落花10日後）が有効である。
- (2) ナミハダニの発生が多い園地では、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布を行う。

【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を用いる。

【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。例年発生が見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木（サクラ、クワ、キリ等）や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。